

論文の要旨

論文題目 初級学習者を対象とした L3 としてのドイツ語格習得に関する実証的研究 – 初級学習者を悩ます dem, des, der, den? –

氏名 今井田亜弓

学位 博士(文学)

授与年月日 平成 15 年 9 月 30 日

本論においては、日本語を L1、英語を L2 とする成人学習者を対象に、純粋な指導環境の中で、L3 となるドイツ語を習得していく過程を「格」に焦点を当てて分析する。自ら収集したデータをもとに、学習者が作る言語体系を明らかにし、その際 各言語体系に外的・内的要因が、どの発達段階で、どのような役割を果たすのかを解明することにより、外国語教育へ応用することを目的としている。各章の概要は以下のようなものである。

第 1 章では、格がもつ統語的・意味論的・談話的機能と、それらの関係について、言語習得という観点から重要と思われるものについて述べる。また GB 理論では、格は一部の場合を除き、動詞の特徴としてではなく文の構造によって規定される (Grewendorf 1988) としている。これに基づいて、この章では、どのような規則にしたがって格が付与されるかを示し、またドイツ語の格形態の特徴を挙げることにより、習得の過程において現れる様々な現象についての問題点を示唆する。また、格の導入方法が習得過程に及ぼす影響という観点から、筆者の授業における格の導入についても記述する。

第 2 章では、言語習得に影響を与える内的・外的要因について考察する。内的要因としては「L2 のある形式に相当するものが学習者の L1 に欠ける場合、想像したより大きな影響を中間言語発達に及ぼし、ある発達段階から次の段階への移行を遅らせたり、特定の発達過程にとどまるという意味で母語の影響が考えられる」(Zobl 1982) という見解に基づいて、母語の影響という観点から、格をマークする形態である冠詞の「定性」と「名詞の性」をとりあげる。冠詞の省略、定・不定という区別のない使用、一方の冠詞の過剰一般化といった現象が特定の格において表れ、従って格の習得の順序や早さに影響を与える可能性があるか、また同様に「名詞の性」という概念が理解しにくい日本人成人学習者においては、とりわけ「無生」の対象において「性」の判断という余分な負荷により、特定の格の習得に影響が表れるかを考察する。また第 1 言語獲得において決定的な役割を果たすといわれる「普遍文法」の第 2 言語習得における影響を内的要因のひとつとして取り上げる。外的要因としては、「指導の影響」と「タスクの可変性」を取り上げる。本論において対象

となる学習者は、授業以外にドイツ語に接する機会を持たず、純粋な指導環境にある。このため、学習者がさまざまな種類の言語的単位に遭遇する順序・頻度・重要さ、遭遇する語や文構造の特徴など、学習者への言語インプットの操作という点から第2言語教授への可能性を探る。

また「タスクの可変性」では、Tarone (1981) は、学習者の言語運用は彼らが頼る様式的基準に従って変化し、その基準もまた談話の形式により異なるとしている。このような流動性が、データ収集時に学習者に与えられたタスクの種類に表れるかという点について考察する。

第3章では、L1 と L2 習得、自然と指導環境、成人と子供、母語の違いを考慮し、格習得に関する様々な先行研究の結果について述べる。格の習得においては、学習者が、ドイツ語の格がもつ機能がどのような形式と結びつくかということを認識する必要がある。しかし格パラダイグマにおける格融合 (Slobin 1973,1982) 同形同音異義語 (Mills 1985) の他、形の区別がつきにくいことによる過剰一般化 (Tracy 1984) などにより、格の習得は容易ではないと考えられる。またドイツ語の格システムは、名詞句の機能を必ずしも明瞭にマークするとは言えず、したがってそのような場合には、これらの機能が「語順」、「イントネーション」によってマークされる場合もある。このような混合のマークシステムを学ぶことは、高い処理能力を必要とするため習得は遅いと考えられている：Linguistische Strukturen und Regeln, die ein hohes Mass an Verarbeitungskapazität beanspruchen, werden spät erworben (Clahsen 1984:25)。

L1 における格習得研究では、子供たちは彼らの母語であるドイツ語の格システムを、ある決まった順序で習得していることが明らかとなっている：The acquisition order of cases based on production data is: nominative > accusative > dative > other oblique cases (Clahsen 1984, Mills 1985, Clahsen et al. 1994, Tracy 1986)。また自然環境で、異なる母語をもつ子供が L2 としてドイツ語を習得する場合、同様に特定の「格習得順序」が観察され、その際 Primus の形態論上の格階層「主格>対格>与格」に従った過剰一般化が起きることが認識されている：Die Übergeneralisierung folgen der morphologischen Kasus-Hierarchie. „Nom>Akk>Dat“ (Wegener 1995)。フランス語を母語とする指導環境における L2 習得では、L1 と自然環境における L2 習得との間に類似した段階が観察され、また格階層に従った過剰一般化も見られる。しかし一方で、指導による影響と思われる相違点がいくつか観察されている (Studer 2000)。この章では、これら異なる環境における格習得過程に見られる類似点、相違点を明らかにする。

第4章では、学習者のストラテジーに焦点をあてる。ドイツ語を母語とする子供においては、2～3才ではまず名詞の有生性を頼りに文が理解され、3～4才になって初めて格表示が用いられる (Primus & Lindner 1994) といわれている。また異なる母語をもつ子供の L2 習得研究 (Wegener 1995) においては、語順と格表示のどちらも用いられるが、語順に頼るストラテジーは L1 習得においてよりも強いという傾向が観察され、この傾向は母語におい

では2～3才ですでに格によって文を理解するといわれているトルコ人の子供達においても観察されている。他方日本人は、母語である日本語の文を理解する上で、格表示をもっとも有力な手がかりとして用いるといわれている (Sasaki 1994)。この章では、日本人学習者を被験者として筆者が実施した2つのパイロットスタディーの結果をもとに、「意味」「語順」「格表示」という3つの手がかりを用意し、学習者において優勢なストラテジーを明らかにすることにより、文を理解する上での格表示の役割について考察する。具体的には、ドイツ語の上達度と格表示に頼るストラテジー間に相関関係が観察されるか、格表示という手がかりは学習のどの段階において重要となるのか、またその際「意味」「語順」手がかりとの関係はどうかという点についてデータを基に検証する。

第5章では、第1章から第4章までの考察に基づいて立てた7つの仮説についてデータを基に検証するため、収集したデータについて各タスク毎に統計結果を記述、分析する。誘導作文については、データからの観測をグループごとにまとめ、さらに全グループにおいて共通に観察された特徴を記述し、仮説の検証を試みる。検証の結果、格の習得順序においては、L1 習得、自然環境における L2 習得、フランス語を母語とする指導環境における L2 習得研究と同様、1格は「無標の格」として最も習得が早い格であることが実証された。しかし Casus obliquus (直立格以外の格) については、他の研究結果との相違点が明らかとなった。そしてその場合、上述の母語の影響が観察されたことから、中間言語の発達に及ぼす母語の影響が示された。また習得順序については、タスクの可変性も観察された。一方指導の影響は、母語とは語順が異なる「付加語としての2格」のマークにおいて観察された。

第6章では、第5章における仮説の検証結果をまとめ、その結果に基づいてさらに考察を試みることによって、ドイツ語教育への応用の可能性を探る。